

谷崎潤一郎と「孝」の思想

田 鎖 数 馬

谷崎潤一郎の「不幸な母の話」という作品を取り上げた。この作品では、水難事故が起こった時に、誰を救助し、誰を見捨てるのかという問題に直面した主人公の姿を描写しているが、こうした問題は、中村正直『西国立志編』、『小国語読本と教壇』「久田船长」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、安部公房「洪水」、武田泰淳「誰を方舟に残すか」などでも扱われていたことをまずは紹介した。その上で、これらの作品における、右記の問題の扱い方の違いには、それぞれの作品が執筆された時代思潮や作家の思想の違いがよく表れていると説明した。

そのことを踏まえて、同様の問題を扱った谷崎の「不幸な母の話」にも、谷崎が重視していた思想の特質が表れている可能性があるとする予想し、作品を精読すれば、それは、「孝」の思想であることが分かると指摘した。続いて、この指摘の妥当性を確認するために、「不幸な母の話」の素材が『今昔物語集』「住河辺僧値洪水棄子助母語」であったことを紹介した。『今昔』の右の話は、親孝行の価値を説いたものである。こうした『今昔』の話素材にしていること

から、右の指摘の妥当性を確認することができるかと論じた。

その上で、谷崎の「孝」の思想に対する関心の意味をさらに明確にするために、「不幸な母の話」と『今昔』との間に、大きな相違があることにも触れた。それは、『今昔』では、水難事故の時に、息子が母への孝行に徹する行為をしており、その息子の行為を讃える話になっていたのであるが、「不幸な母の話」では、水難事故の時に、息子が親孝行であつて欲しいという母の期待に背く行為をってしまったと感じており、息子はその苦悩から自殺するという話になっていたという相違である。この相違に着目すると、谷崎の「孝」の思想に対する関心のうち特に重要であつたのは、親孝行であり得ないことに伴う罪悪感の問題であつたと判断し得ると述べた。

それを踏まえて、谷崎がその罪悪感の問題に関心を寄せたのは、少年期に修身の授業に多大な影響を受けたことが一つのきっかけとなつていることを、そのように影響を受けた理由とあわせて明らかにした。最後に、関西移住後の谷崎文学の軸となる母性思慕の主題は、親孝行ではあり得なかつたことに伴う罪悪感を癒してくれる存在としての母のイメージを獲得することによって形成されてきたと指摘しつつ、谷崎文学にとつて「孝」の思想が重要な意味を持つていたことを述べた。

(高知大学人文社会科学部准教授)

※編集委員付記

田鎖数馬先生のご講演内容は、御著書『谷崎潤一郎と芥川龍之介「表現」の時代』(二〇一六年三月 翰林書房、二〇一七年第二十七回高知出版学術賞受賞)に補論として収録された「谷崎と孝子説話」を一部省略・加筆した原稿に基づくものです。